

氏名	中村 延江 (ナカムラ ノブエ)
本籍	東京都
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博乙第 25 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	高齢者の意識的及び無意識的自己像と成育歴との関連—交流分析理論の脚本分析を中心に—

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	渡 辺 修一郎
	(副査) 桜美林大学教授	白 澤 政 和
	桜美林大学教授	長 田 久 雄
	国際医療福祉大学教授	村 上 正 人

論文審査報告書

論文目次

第 1 章 序論	・・・ 1
はじめに	
メンタルヘルスと自己像	
意識された自己像と無意識の自己像	
質的分析の方法と脚本分析	
第 2 章 研究の目的と意義	・・・ 2

研究の目的と意義	
研究デザイン	
第3章 研究	・・・2
研究Ⅰ 主観的幸福感とバウムテストの指標との関連	
目的	
対象と方法	
結果	
考察	・・・3
研究Ⅱ 高齢者の無意識の自己像及び主観的幸福感と成育歴との関連	
～交流分析理論による脚本分析を用いた質的研究～	・・・3
目的	
対象と方法	
インタビューガイド	
結果と考察	
第4章 総合考察	・・・4
文献	・・・4

論文要旨

高齢者のメンタルヘルスの程度には個人のとらえ方である自己像も関与することが指摘されている。自己像には、意識された自己像と無意識的な自己像があるが、高齢者の無意識的な自己像に関する先行研究は少ない。そこで本研究では、高齢者の無意識の自己像と意識された自己像との関連を明らかにしたうえで、自己像の形成に影響する成育歴上の要因を明らかにすることを目的として一連の研究を実施した。

研究1の目的は、意識的自己像と無意識的自己像との関連を明らかにすることである。日常生活が自立している65歳以上の高齢者153名（男性58名、女性95名）に対し、意識的自己像としての主観的幸福感尺度（WHO Subjective Well-being Inventory）、うつ尺度（Self-rating Depression Scale: SDS）、不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory: STAI）、無意識の自己像が示されるバウムテスト（Baum Test: 樹木描画法）の調査を行い、それぞれの関連を検討した。バウムテストについては描画全体の評価とされる「全体印象」、「統合性」、「安定性」、「エネルギー」、「幹の太さ」、「枝の広がり」、「根と地面」についてそれ

ぞれ 5 段階評価し得点化したものを指標とした。主観的幸福感との相関係数は、SDS が-0.5、STAI の特性不安で-0.6、STAI の状態不安で-0.4 と有意な負の相関を示した。一方、SDS と STAI とバウムテストの各指標との有意な関連は認められなかった。主観的幸福感の下位尺度とバウムテストの各指標との間にはいくつか有意な正の相関が認められたが、その相関係数は 0.17～0.21 と弱い相関であった。これらの結果から特に意識的自己像と無意識的自己像に差がみられる者についてはその要因を詳細に検討する必要があると考えられた。

研究 2 は、研究 1 の課題をもとに、自己像の形成に関連するエピソードや感情体験と、無意識の自己像としてのバウムテストの指標との関連を明らかにすることを目的に実施した。対象は、日常生活が自立している 65 歳以上の高齢者で、主観的幸福感尺度とバウムテストにて把握した無意識的自己像との関連が特徴的であった 9 例である。対象に交流分析理論の脚本分析を用いた半構造化面接を実施し、成育歴上のエピソード等とバウムテストに示された無意識の自己像の指標との関連を検討した。対象の主観的幸福感はやや問題ありが 3 例、不良が 3 例であった。それぞれの脚本分析から、幼児期のエピソードとそれに関する感情体験が自己像、特に無意識の自己像の形成に大きく影響されている事が推察された。しかし、意識的自己像は高いが無意識の自己像に大きな問題が示され実生活で不適応感を示したのは 1 例のみであった。意識的自己像を良好と自覚している要因は、①状況受容、②諦観、③深く考えない、④合理化、⑤思い込み等の機制が示されていると考えられた。また、これまでの研究から高齢者は現実生活で特に大きな問題がない場合は、自己の人生や考え方を肯定する傾向があるとされており、今回の対象者もこれに該当したものと考えられた。バウムテストは無意識の自己像が示されるとされているが、本研究により、問題になる指標は成育歴上の幼児期のエピソードとの関連が大きいことが示された。意識的自己像も成育歴との関連があるが、むしろ意識して自己を捉えようとする個人力によって形成される部分もあることも判明した。ただし、高齢者は意識的自己像を良く自覚する傾向がある。このため、バウムテストにより無意識の自己像を把握し、その指標の程度により、成育歴などを十分に聴取し、対象への理解を深めてサポートする必要があると考えられた。

論文審査要旨

本論文は、高齢者の無意識の自己像と意識された自己像との関連を明らかにしたうえで、自己像の形成に影響する成育歴上の要因を明らかにした一連の研究をまとめたものである。研究 1 では、無意識の自己像と意識された自己像との関連を解明するため、平均年齢 71 歳の自立高齢者 153 名に対し、バウム(樹木画)テストにて無意識の自己像を把握し、主観的幸福感、うつ尺度、不安尺度との関連を検討している。うつ尺度および不安尺度は、主観的幸福感と負に相関するが、バウムテストの各指標との有意な関連は認めないこと、主観的幸福感とバウムテストの各指標との間の相関は弱いことを示した。研究 2 は、脚本分

析を用いた質的研究により、自己像の形成に影響を与えた成育歴上の要因を明らかにすることを目的に行われた。自立高齢者9名に対し、バウムテスト、主観的幸福感を調査したうえで、半構造化面接にて成育歴を調査した。成育歴に関する逐語録を用いた脚本分析にて、意識的な自己評価と無意識の自己像の成立過程と成育歴の関係を検討し、意識的自己像、無意識的自己像のどちらにも成育歴上のエピソードが関連していることを明らかにしている。十分な国内外の先行研究の検討をもとに適切な方法にて分析された一連の研究は、バウムテストで把握した高齢者の無意識の自己像と意識された自己像との関連を検討したうえで、無意識の自己像の成立過程と成育歴の関係を明らかにする独創性の高いものであり、元気な高齢者の考え方や対処の仕方などの要因を解明し、不適応状態が考えられる高齢者への新しい支援の方法を提言し、また、メンタルヘルス向上のためのプログラムの多様性に貢献する意義を有するものであり、博士論文として十分な水準にあるものと判断し、合格と判定した。

口頭審査要旨

公開審査では30分間の論文概要の発表後、30分間にわたり質疑応答が行われた。主査および副査より、対象を選んだ基準、第2研究で質的研究を用いた理由、現在の幸福感的状況で脚本が変容する可能性などの思い出しバイアスの関与の可能性、などについて質問がなされた。それぞれの質問についての的確な説明と考察がなされた。

公開試問後の主査・副査による審査会では、研究の枠組み、先行研究のレビュー、目的と意義、新規性、研究方法、結果および考察、研究成果の活用のあり方など論文全体について精査され、いずれも博士論文として十分な水準にあるものと確認された。

高齢者のメンタルヘルスに関与するとされる自己像には、意識された自己像と無意識的な自己像があるが、高齢者の無意識的な自己像に関する先行研究は少ない。バウムテストにより把握した高齢者の無意識の自己像と意識された自己像との関連を検討したうえで、高齢者の生活満足感や幸福感の背景にある意識の問題を、交流分析の脚本形成理論に照らして、無意識の自己像の成立過程と成育歴の関係から分析するという発想は大変ユニークで独創性が高いものと評価した。本研究の成果は、元気な高齢者の考え方や対処の仕方などの要因を解明し、不適応状態が考えられる高齢者への新しい支援の方法を提言し、また、プログラムの多様性に貢献するうえでも貴重なものと判断された。

以上により、博士論文として十分な水準にあるものと、主査および副査全員が合格と判定した。